日本最初の海洋船舶艦長技術職の幕末時代の経験 — John Man

津田　眞澂※

第一編　生い立ち

第一章　土佐藩幡多群・中の浜

土佐国は1600（慶長8）年まで豊臣秀吉との領主覇権大戦争の継続で徳川家康が勝利し、長宗我部家が関が原の大決戦で敗北して浜松掛川の山内一豊家が徳川家康に譲渡されて入国して土佐藩を獲得したことに由来した。土佐藩は四国地方南半分を占める大国で吉野川が北を東西に流れ、西は四万十川が東北にあり、東南は室戸岬、西南は足摺岬を持ち、太平洋に接するが、西南は土地が貧弱でとくに足摺岬周辺は海の鰹漁以外に生きられない場所で、そこには和歌山あたりまで隊船が鰹節加工漁に大量進出がおこなわれ、無学な「糞民」で知られていた。山内家がこの地域に文字を知らせる教育活動を行なった歴史はなく、逃亡する貧民を刑死させる規則が豊富な藩であったことが知られていた[1)]。

1827（文政10）年1月1日、幡多郡中の浜の藁家の貧しい集落のひとつに男の子が生まれて万次郎と名付けられた。武士時代には姓を名乗ることは禁止されていたが、父は小畑しか耕せず、兄は脳が弱くて労働できず、母は志ほ、姉はセキ、シンと呼び、村年寄りに奉公して小銭を稼ぐ惨めな暮らしだった。その父も8歳の時に病没し、男の子一人の万次郎は家計を背負って働きに出た。家にも村年寄りの家にも字を読み、知る者は皆無であった。万次郎は村年寄りの家に奉公に出て、子守、掃除、肥くみ、薪わり、米つきの多時間重労働、僅かな駄賃、粗末な飯、辛い沢庵で毎日を過ごして、村役人の命令、通達も理解できる大人はいなかった。

中の浜では鰹漁の時期は最盛期となるが、13歳を越えないと4～5人乗りの漁船に炊夫として雇われない。大漁だと稼ぎが出る。13歳になった万次郎は叔父と母親の口利きで5人乗りの金比羅船に雇われて1841（天保12）年正月5日に乗り込んだ。時期は紀州印南浦（和歌山日高群）の出漁におくれた。この船は足摺岬を東へ回った先で北西風で遭難し、室戸岬まで煽られ

1）この時期の土佐藩の風土の全体についてはマリアス・ジャンセン（平野道雄・浜田亀吉訳）『坂本龍馬と明治維新』時事通信社、1965年が最良であろう。これには吉田東洋、坂本龍馬がジョン・万次郎と語り合った事実が明らかにされている。また司馬遼太郎『龍馬がゆく』全8巻では勝海舟、坂本龍馬、万次郎との海軍操練所での会話が記録されている（第3巻）。万次郎のアメリカ生活については中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房1970年、文倉平次郎『幕末漂流ジョン万次郎』名著刊行会、1979年など多数が刊行されているが、本論文では中沢博『私のジョン万次郎』小学館1994年、津本陽『椿と花水木』上下巻、平成8年を利用した。中沢氏の実地調査のように、津本氏の著作による万次郎のアメリカでの結婚生活については根拠がなかったようだが、私は津本氏の事実の探究ぶりの熱心さと文章の美しさに感動した。

※青森公立大学

て、また足擦岬に戻された。ようやく正月14日に無人の島に上陸できたが、ここで水、食料が尽きてしまった。

ハレンケン・アイランド

金比羅号のような小舟が波風ですべて崩壊する直前に万次郎たち5名が上陸できた島は八丈島、小諸島の中間に位置する小島の1つ、鳥島だった。その位置は現在の東京港から南へ570キロ隔たる洋上にある米名でハレンケン・アイランドであった。アメリカは1820年代から鯨油を燃料として太平洋より乗出す捕鯨業が盛んになり、西部のメキシコとの戦いでカリフォルニアの金、石油の開発が盛んになるまでは捕鯨業が太平洋進出の主力になっていた。ハレンケン・アイランドにちかづいたのはマサチュセッツ州出身の36歳の船長ウイリアム・エッチ・ホイットフィールド船長が指揮するジョン・ハウランド号（乗組員34人）で1841（天保12）年5月29日に万次郎たちを救助した。

この期間の計算は日本が陰暦月、アメリカは太陽暦なので面倒である。ここでは断らない限りは太陽暦を使う。念のために、万次郎たちが無人島に上陸したのは天保12年正月14日、捕鯨船に救助されたのは同年5月9日、太陽暦では無人島上陸は2月5日、捕鯨船に救助されたのは6月27日である。陰暦では2月に閏月というダブリ月があるので計算が難しい。ともかく正確には万次郎たちは無人島で143日も過ごしたことになる。

ジョンハウランド号がハレンケン・アイランド島に接近したのは、その島の近海で捕獲できる海亀のスープがアメリカ人に珍味だったからで捕鯨ではなかった。この幸運が万次郎の生涯を決めた。

第二節　ホイットフィールド船長

義父になる

船長ホイットフィールドはメイフラワー号に乗ってアメリカ大陸へとイギリスから渡った人の子孫だった。船長は4年前に新妻を病気でうしなった航海士で、その航海日誌によれば、「異国人は激しく飢えを訴えるが、ほかはなにも理解出来ない」と正確に記録されている。そしてその救済方法は適切だった。すなわち飢えに対して、ゆっくりと時間をかけて麦の粉と油、塩を入れて蒸した餅を与えた。数日を経過してから白飯、野菜煮つけ、肉に進み、静養させて労働しないでよいとして健康回復に専念させた。この頃に日本の武士たちが漁民にこれほどの配慮をしたであろうか。

体力が回復するにつれて、万次郎は異国船員の働きぶりに目を開かされた。船長・キャプテンの指導は秩序づけられ、作業順序は正確で骨休み、手抜きがない。帆柱に吊るされた鉦の音で規律正しく生活の歴史が進んでいく。鯨油の採取が終わると大きなベラッシで看板がすられ、洗い清められ、血や匂いは残らない。船長、キャプテンなど監督者は仕事の怠けは厳しく叱責するが、手をあげたりしない。作業後に船長は仕事振りを評価して給与の査定をしたり、称賛

を告知する。休憩には船員は種々の楽器をならして唄を歌い踊る。7日目には服を整え、賛美歌を唄い、神に祈り、餅で食事をする。

船員に救助された時に最初にハウランド号の名を賢明に覚えたのは万次郎だった。乗船して最初にその船名を暗唱したのも万次郎だった。船員はその暗唱に拍手して紳士ぶりを示してくれた。万次郎は字をまったく知らないのに船員の仕事ぶりを見て字の書き方をならおうとしたが、日本語も書けないのでは無理だった。

捕鯨船は担当係が帆柱を登って頂の籠に乗り、黒い鯨の背中を見つけると「デア・シー・ブローズ。ブロオーズ」と叫ぶ。万次郎はこの呼びかけが気にいって高声をあげようとした。これをキャプテンが気に入って、万次郎が被る笠をくれた。他の4人はやろうとはしなかった。

これを見たポールという船員が万に英語を教え始めた。万はノートを貰ってまったく分からない英語で覚えようとし始めた。ポールは室内から船内へと部分、器具の名を教え、その字を書かせて歩きだした。

それらを懸命に書き、字をおぼえている間に、キャプテンが夕食後の食堂を片づけて勉強することを許して、キャプテンが絵本を使って読み書き、言葉づかい、話かた、振る舞いを教えるようになった。

船長が万に興味を持ち、自室に呼んでくれた。その時、室にはいった万は壁に掛けられた若い婦人の服を見て、これが船長が失った妻だと思って涙を流した。万は会えない母、妹たちとの別れを思ったからだった。

第三節　フェアヘブンへ

船長はある日、万を呼んでオアフ島に休んで来年始めに捕鯨業に戻ると語り、私と一緒にアメリカに来ないかと語りかけた。船長は帰国後にフェアヘブン生まれでニューヨークにいるアルバティーナと結婚予定だったから、万を連れていきたいと思った理由はよくは分からない。だが船長は助けた遭難日本人を養子にしようと思ったのだから、万への思いが強かったのだろう。

オアフ島ハナロロに1841（天保13）年12月に到着した万以下5名は人口2000名の都市が清潔で警官、木戸番がなく、クリスマス前の町が綺麗で驚いた。船長は教会のデイマン牧師にクリスマス礼拝で万を紹介した。船長は万をアメリカに連れていくと発表し、他の4人と別れを告げて、1842（天保13）年1月中旬の朝、ジョン・ハウランド号と出帆した。この時から万次郎は「ジョン・マン」と呼ばれることになり、別れた友から励ますためにキャンデーをくれたり、遠眼鏡を貸してくれるようになった。

だがそれと同時にホィットフィールド船長の教育水準が俄に上がった。すなわち捕鯨船での伝馬船に乗っての銛打ち、捕獲鯨の処理は毎日の業務であり、日本列島航行の際にはハレンケン・アイランドに上陸して別れを告げ、日本列島を周航した。捕獲鯨は600頭を超えるほどに達した。

船長は万が見たこともなかった地球儀、天文図を引き出し、天文学、世界発見史、アメリカ発見史の講義を開始し、万はあまりの知識にへとへとが続いた。船長は万を後継者として最高の捕鯨船長、1等航海士、海洋技術者にするために、フェアヘブンで著名な技術職業学校に学ばせて資格をとることを予定したらしい。そこで北へ上がり各国船長を紹介した上で、マリアナ諸島を縫って南南東へ向かい、1843（天保14年）4月下旬、南米ホーンへ南下し、大西洋をわたり北上し、初夏の朝、マサチュセッツ州ニューベッドフォード島に到着した。その頃はアメリカ最大の捕鯨船基地だった。左が人口1万のニューベッドフォード、右が5000人のフェアヘブンで、船長は知人とその娘3人が住む家に万を連れていき、そこに滞在させた。船長はニューヨークにアルバティーナを迎えにゆき、万はそこの二女で1828年設立のオックスフォード・スクール（小学校）の教師が指導する学校に入学した。アルバティーナは万が養子であることを承知でフェアヘブンから当方5里のスコンチカットネックの14エーカーの土地を新居とし、万に2階の部屋に住まわせることにした。万はスコンチカットネック小学校に転校して卒業した。これは日本人で最初の小学校から正規教育を卒業した例とされている。

ホイットフィールドは航海士資格を取るためにフェアヘブンにあるバートレッド・アカデミーに進学することを薦め、1844（弘化元）年1月、難しい入学試験に合格し、たちまちトップに踊り出た。

バートレッド・アカデミー卒業の日、ホイットフィールド船長は1844（弘化元）年に捕鯨船に乗っており、万次郎は卒業後にも捕鯨船に必要な桶づくりの修行があり、二人が会えたのは1845（弘化5年）のころだったらしい。ホィットフイールド船長は養子の生国に気をつかっており、イギリス、フランスの阿片戦争で清朝の1841（天保12年）のイギリス宣戦、清朝外交全権大臣林則徐の阿片焼却開始、1842（天保12）年の南京条約、イギリス軍艦来日計画を知っており、この時期を逃すと養子の日本帰国が不可能になると心配した。

第四節　万次郎帰国へ

アメリカ～西部～ハワイ～琉球～薩摩へ

サンフランシスコ

万次郎が中の浜で生まれる11年前にアメリカではJ・モンロー大統領がアメリカ創立期の3代にわたる功労者の一人として選出されていた。モンロー大統領は偉大とはいえなかったろうが、ロシア帝国のカリフォルニアへの植民地拡大への反対、アメリカのヨーロッパ諸国への干渉否定を書いて、それを「モンロー主義」の宣言として有名になった。北アメリカにはスペイン、イギリスなどの植民地からの独立要求が多く、このモンロー主義は簡単には解決しなかった。ところが、カリフォルニア、ニューメキシコをふくむ広大な地域をアメリカはメキシコ政府から1500万ドルで買収し、ついにアメリカは大西洋岸から太平洋岸までの領土を支配するようになった。この時、1848年1月、サクラメントの東方で砂金が発見され、アイルランド飢饉を契機とする大移民がヨーロッパから開始され、「フォーティナイナーズ」と歌われるゴー

ルドラッシュ・大移住時代がカリフォルニアで発生した。1500年に9万人とされたカリフォルニアの住民が1960年には4倍の36万人となったのであった。

捕鯨業の先細り、金堀り、石油の繁栄はフェアヘブンから帰国のきっかけになったのかもしれなかった。万は「フォーティナイナーズ」の先端であったろう。万は金採掘の作業具、諸道具、ピストルを積み込んで雪降るニューベッドフォードを運送船に乗り込んで出帆していった。

このステギリッツ号の運行には万も助力をしながら、1850（嘉永3）年正月には太平洋側へ4月にチリのバルウァライソ港へ入り、8日間停泊し、5月下旬サンフランシスコ湾にはいった。サンフランシスコの人口だけで2万人に達したがフォーティナイナーズはもう9万人に及んだとされていた。万はそこから友人と共にサクラメント川をさかのぼりシェラネバダ山脈を見て、金脈があるノースリバーに入り、宿の主人が世話する鉱区で採掘を開始した。ここでは銃撃は日常だった。万は博打、遊興、飲酒を一切せず、600ドルを稼ぐと仕事を打ち切った。カリフォルニアが9月にアメリカ31番目の州になると報道された8月、万は仕事仲間と別れて、豪華な客船エライシャー・ワーウヘック号に乗り、18日後の8月末にハナロロに入港した。

琉球へ

万次郎のカリフォルニアでの稼ぎはハワイで残った4人の遭難者を米船で土佐へ送って貰う費用を蓄える目的だった。ハナロロに到着すると万次郎はフェアヘブンの義父夫妻に知らせて、以前に知ったデイアマン牧師を訪ね、4人の日本人を探して正式の身分証明書をアメリカ駐在領事から交付を申請し、蒸気船への収容伝馬船を購入する手筈に取りかかった。

デイアマン牧師は11月1日号の地方紙フレンド号に万次郎の紹介記事を掲載し、12月14日のポリネシアン紙に再び紹介記事が掲載され、その反響はすぐに現れて、アメリカ船が万次郎が用意する伝馬船を収容して琉球まで送ることになった。

琉球まで天候によるが30～50日を要する。万次郎以外に2人は既に再婚していたが別れて帰国することにした。琉球は薩摩藩統治ということになっており、出帆して18日正午に摩文仁間切の小渡浜に到着した。薩摩藩の統治首都は那覇だったが、日本の尋問、取り調べは組織階層が多すぎ、業務配分も雑多で、数日間かかった。その間、万次郎は琉球語、始めての日本役人の階層会話、高位武士たち、家臣の振る舞い方法を身につける勉強に精を出した。それから徒歩で那覇まで行ったが、泊まる村人に樹木、草花、病気・怪我、治療法の知識、琉球語を学んだ。高位武士、家臣などの会話方法をまず学んだのは万次郎だけだった。

万次郎たちが小渡浜に上陸した日の前日、薩摩藩では世子斉彬が父の斉興からの相続問題が決着して第28代藩主に嘉永4（1851）年2月に就任したということで最初のお国入りということで5月8日に鹿児島に入った。そして斉彬は万次郎が頭脳明晰であることを警護役人から聞いて海辺の屋敷に呼ぶことを命じた。斉彬の万次郎との会談は7月31日から9月18日の長期に及び、万次郎はアメリカの事情を語り、斉彬は当代最高の軍事政治家藩主だったから、関心は

広かった。特に斉彬はアメリカに暗く、知りたいことが山ほどあり、万次郎はヨーロッパ、中国を尋ねたいということもあり、とくに斉彬が随一の始めての高知識の藩主であることに感激した。

斉彬は幕府の外国関係の支配の当事係である長崎奉行所に万次郎との面談の事情を報告し、その報告を長崎奉行内藤安房守が江戸を警護する江川担庵などに送るということも起きた。これが万次郎が幕府高官に知られる最初の機会であった。

長崎奉行所での調査を通過すると、該当者所属藩が長崎に役人が呼び出されて調査の上入国が承認される。万次郎たちは10月1日に高知城を放免されて故郷に向かった。斉彬の書簡が決定的証拠で奉行所の調査は非常に緩かった。そのこともあって万次郎は遭難した時とは打って変わって士分となり、新規小者、下一人扶持切り米二斗として帯刀となり、万次郎は高知の教授館で勤務して海外事情を語って聞かせるという役回りになった。万次郎は船出した1841（天保12）年正月は14歳、今は25歳になり、母の志おは溢れる涙を止めず、妹3人はむせび泣き万次郎を失って置いた苔むした丸い墓石を抱いた。

第五節　江戸への呼出し

1853（安政6）年6月、アメリカのペリー艦隊4隻が浦賀に日米開港交渉を求めてあらわれた。時の老中首座は備後福山城主で34歳の阿部正弘であった。この老中首座から、6月20日に土佐藩江戸留守居役広瀬源之進が呼び出され、万次郎を国許から江戸に呼び出すことを命じられた。長崎奉行からの報告で万次郎には、心配はないと事前に知らせておけとの配慮つきだった。

阿部正弘への進言は江川担庵（オランダ軍学、江戸湾海防）、大槻盤警（オランダ学者）、林大学頭（昌平黌学長）で、8月30日に江戸鍛冶橋内の土佐藩上屋敷に到着した。江戸城に列座したのは、この他には西丸留守居筒井政憲、勘定奉行川路聖謨、松岡河内守、だった。

このメンバーを「幕閣」という当時の政策集団であるとすれば、対象がアメリカという新規の国のこととはいえ、そこで出された延々と続いた質問にはまったく無知であったのは驚くべきなので、質問事項とそれに対する万の説明だけを紹介する。

1）アメリカの東西南北の位置、隣国との関係、気候、産業構成、通商関係。

2）独立の事情、34州による共和政治、人種はインディアン、多数国外国人。

3）国王はなく、人民入札による4～8年任期の大統領による交代、州は知事（ガバナー）の統治。

4）大統領府はワシントン（人口は大阪程度）、法による統治、東西交通時間は陸地なら4か月、船便ならば東西は南北7～8か月、江戸～カリフォルニア間は約3千里。

5）現在の大統領はミラード・フィルモア。到来軍艦司令官はベルリは間違いでペリー、ロード・アイランド出生、メキシコとの戦いで戦功効あり、熊と綽名された名将。日本との親交開始は大統領からの熱心な希望。その理由は海上で日本から襲われると鳥獣扱いなので、わが国のように自国・他国の人々の別隔てをしない扱いを望んでいる。

6）日本の歴史についてはすでに多数の著作、資料があり、必要な場合に参照可能な状態に、アメリカには物資で不足は無く、ただし通航のさい、積んで補給可能な場所を必要とするので、長崎で江戸に補給するという不便さは耐えがたい。

7）戦闘では銃、砲を使用し、刀剣を腰に差すような戦闘はしない。海では大砲と台場での戦闘がありうるが、台場が遂に勝利するような例はない。それゆえに海軍の建設は急務である。軍艦に乗り込む人数は平生は500名、戦闘では1500名が必要。

8）沖合から陸地を攻める場合は大砲を放つだけではなく、バッテーラ（端艇）も使用する。バッテーラにも口径8センチほどの大砲を装備させる。

9）異国の大船は世界の7つの大海を自在に航行するので沖に出ることは恐れない。恐れるのは湾・港内の浅瀬、沈憔であり、先ず測量しなくては航行できない。これは船の常法である。

10）明年ペリー艦隊来航の際、アメリカとの通弁はオランダ語ではなくアメリカ人が話すアメリカ語が不可欠だろう。

その他もっと小さな質問でのやりとりで長い時間が過ぎたが、次第は上記で想像できよう。

この面談後に江川担庵と阿部正弘は万次郎の姓に中浜を与えて武士扱いにして、中浜万次郎を借受け、阿部は御普請役格として江川担庵の屋敷に居住させることにした。ペリー緊急問題対策への人材が得られた日であった。

第六節　中浜万次郎

幕府家臣へ

阿部正弘は万次郎を土佐藩から幕府直参に引き揚げて、万次郎は江川担庵の下で江戸湾周辺の防備役に入った。担庵は島津斉彬と密接に連絡しながら高輪・田町の藩邸に各3基の砲六問を備えて軍備を固めた。万次郎は砲術、機関銃、砲弾、銃弾等の技術について学習を重ねるという連日が始まった。特に江川担庵に伴われて、フェアヘブンのフェニックス要塞に備えられた巨大な野戦砲の実習を見学して、江川の力量に尊敬と師と仰ぐ意思を固めた。また江川の師匠である高島秋帆（1798～1916年）が砲術近代化を提言して幕府から「蛮社の獄」として終身禁固（1839年、天保10年）にされた時、その門人を引き取って砂糖・卵でパンの朝食を取る江川に新しさを感じた。

当時の江戸はフェアヘブンにいた万次郎にとって人家に住むとは言えない環境だった。男性の立ち小便は野放図だし、丹前を着ながら帯を締めず、酔ってふらふら歩く男性は数知れず塵芥はすさまじく、江戸は武蔵の空っ風が吹き、関東ローム層の表土が舞い上がり、黒煙が立ち込める江戸名物と称される、パンとは裏腹の世界だった。

万次郎がアメリカから持ちかえった著作、資料、時計など夥しかったが、その中でウェブスター辞典は日本最初の著作で貴重であって、それまでの幕府のオランダ語の字引を通訳用に英語に変える役割を果たした。また持ちかえった物理学入門、機械工学原理、大著のアメリカ合

衆国原理は万次郎に翻訳されて後々まで使われるようになった。とくにアメリカ合衆国原理は本文414ページ、数率表961ページで、万次郎はこの翻訳で白髪になるほどだった。

1853（嘉永6年）高島秋帆は約11年に及ぶ獄生活から解放され、海防係り御用、大砲鋳造方に召し抱えられ、担庵と同居した。担庵は神道無念流の友直心影流団野源之進の次女鉄16歳を万次郎と1854（安政元）年2月に結婚させた。万次郎は27歳だった。鉄は地味な働き者だった。

第二章　阿片戦争と日本列島

第一節　阿片戦争の開始

万次郎が生まれた1827（文政10）年は徳川時代で文化・文政時代（1804～1829年）の末期で、ヨーロッパ・アメリカは農業革命が工業化革命に進行し始めた時で、イギリスを先頭とする政治的には帝国主義の時代に入っていた。その先頭をすすんでいたのはイギリスで、その世界他地域への進出はインド・ムガール地域の占領に象徴されていた。その代表の1つはアジア・中国地域への進出であった。

中国は自国を世界無二の皇帝支配国と自負し、アジアの他地域は非支配属国でパミール高原以西ヨーロッパも例外でなく、わが世界は貿易不要の楽園であるとして、世祖順知（1644）年からオランダ、イギリス、ロシアと物資交流の歴史は始まったが、それらは他国が必要だからであって自世界の明（みん）には不要で恩恵に過ぎないと見なしていた。従ってその明が1911（宣統3）年に滅亡しても、その思想は不変で、パミール高原以西で貿易思想が具体化しても貿易の思想、理論の展開は中国では馴染みにくかった。

アメリカでも中国とは貿易を管理する国営の「公業」（13社）による賄賂を得るために習慣が成熟せず、イギリスでも求める農産物は紅茶に限られ、商業は不振で推移していた。ところがイギリスの農業が本国、植民地で盛んになり、紅茶喫茶が定着し始めると紅茶輸入が増大し始めた。ところが中国は銀通貨国（補助貨幣は銅銭）なので、貿易会社の東インド社（国営）では中国経済への銀投入が増えて、中国への代替物導入出で銀持ち帰りを狙う方法が探索された。

ここで開発された方法は占領したインドから持ち込むアヘンという麻薬で、採取したアヘンを練り、高温で揮発させて煙草で吸引すると、睡眠、快感を得ることであった。このアヘンは大商業となり、例えば1817年には数量3968箱（1箱100斤）、売り上げ408万スペイン・ドル、1838年、28,307箱となり、売り上げには税金引き上げが入るから、すさまじい取引量、増税となった。アヘンは中国では生産されないので清朝では労働者の無気力化、肉体消失を恐れて禁止を布告したが、中国は満州、蒙古、北京、広州と地域、人種がことなるために威令行なわれずに推移していった。

この阿片貿易はイギリスが主力で後にフランス、貿易地域は南中国の公社官僚で、イギリス

も東インド会社を民間会社に改組して他の企業家の投資に開放する程に利益が拡大した。そこで清国皇帝道光帝は長い論議の紆余曲折の末に林則徐を1838年、38歳で欽差大臣（貿易外務）に任じて広州に送った。イギリス、フランスとの公益中心地は江南にあった。林則徐は1840（天保11）年にアヘン禁止の法令を出して実行した。阿片戦争の始まりだった。中国はアヘンを隠し持つ母船を攻める事ができないために5月1日アヘン母船を捕獲できなかったが5月15日にアヘン没収焼却を完了した珠江川鼻（珠江内）で海戦争が行なわれて、アヘン戦争の開始とされた。1840年7月4日とされている。これはイギリスが商業利益のために相手国産でない麻薬を持ち込んで戦争した、国際的に最も卑劣な戦争と名付けられている。この戦争は1842（道光22年）8月29日にイギリス艦コーンウォルス号で調印された南京条約でおわった。中国のイギリスへの没収は2100ドルでその他、治外法権、英人捕虜釈放、関税問題等の追加条項があり、英艦隊、商船の軍事力で清国は完敗以上であった。

だが忘れてならなかったことは、このイギリスとの関係で1851年に広西省金田村で貧民が皇帝、阿片国に反乱の声をあげ、1857年には南京にまで迫ったことであった。この太平天国騒乱は1860年の第2次阿片戦争による北京条約で20年の戦乱の目を閉じたが、幕府の恐怖は清国ではなく、ひきつづきイギリス、フランス、そしてアメリカ、ロシアへ襲撃への恐怖を増大させることになった[2)]。

ロシアの侵略

1861（文久元）年2月、艦長ビリレフ以下360名を乗せた蒸気艦隊ポサドニック号が船体修理を口実として日本海を縦断して対馬島の芋崎に上陸して海軍基地施設の戦略地点を保護領にすることが開始された。これはイギリス、フランスがこれを共同海軍基地とする謀議の先手を取ったことだった。この背後にはアヘン戦争の北京条約で、支那海の警備、その近海の制約のために対馬を海軍根拠地とする協議がおこなわれたことにより、ロシアが北京条約で沿海州を獲得して東方の要塞ウラジオストックの建設を開始した年にあたっていた[3)]。

阿部正弘は1845（弘化2）年には老中首座であり、1848（天保11年）以来、阿部はオランダ艦からヨーロッパ、アジアの情報を受け取っており、その場の対応を取っていたから、イギリス、フランスそして清の内部事情について幕府としての分析をすべきであったが、悔やまれるところである。

文化・文政時代（1804～29年）はヨーロッパ時代は国内工業化、未開地侵略の開始の時代であり、幕府文化は将軍家斉の時代で農村疲弊、一揆続発で内政危機が続いていた。ここで阿片戦争が日本の海を衝撃し、1842（天保13）年にオランダ船が幕府との連絡でイギリス軍艦

2）陳舜臣『実録アヘン戦争』中公新書1971年、陳舜臣『阿片戦争』3巻、講談社文庫昭和48年、陳舜臣『太平天国4巻、1988年、鈴木達雄『インド独立史』中公新書、昭和47年

3）芝原拓自『開国日本の歴史23巻』167～173ページ、小学館、1975年

の来日計画を報じたが、日本列島の各地に現れ始めたロシア、フランス、イギリス艦船などに対して、1825（文政8）年の異国船打ち払い令の古くなった政令を守り、1828（文政11）年にシーボルトを幽閉したり、1839（天保10）年に蛮社の獄という野蛮な弾圧政策を実施するような未開な状態で推移していた。

その中で阿部正弘は水戸藩主の徳川斉昭（1800～60）を頼ったが、この徳川三家の一つは「大日本史」の伝統から藤田東湖（1855年没）、会沢正志斉（1863年没）のような過激攘夷派の主張に転じ、また非常な淫欲で城内に有名で、それを大名溜派筆頭の井伊直弼とまっこうから対立した。井伊直弼はペリー来航に対する藩内、正弘老中の各藩文書調査に際して不戦、貿易進出を主張しており、徳川斉昭と対立した。これが万次郎の仕事にはっきりとあらわれてきた。

阿部正弘老中首座は薩摩藩主島津斉彬も最有力藩主、13代将軍家定の子女候補として送っていた。斉彬（1809～58年）は、万次郎の帰国時に会って、そのすぐれた知識に万次郎を驚嘆させた程であり、1852（嘉永5）年にはアメリカ艦隊来航予定の予報を入手して幕府に大砲船の建設黙認をえて日本最初の洋式軍艦昇平丸を完成させて江戸に回航し、1854（安政元）年には、幕府の政令を大船建造解禁と改めさせて大船12隻、蒸気軍艦3隻の計画を立て、同時に日本船印を日の丸の旗印とすることを幕府に建議して採用させた。斉彬が1858（安政8）年に急死しなければ、幕府の政治の変化に影響がありえたと思われる。

第二節　江川担庵での万次郎の技術教育

万次郎は江川担庵が神奈川で持つ自分の土地の山野で建設した伊豆韮山での溶鉱炉を政藩、薩摩藩との溶鉱炉研究と密接に連絡しながら、大砲、弾薬、火気による怪我治療、砲術練習の教育・実習に奔走し、万次郎は専門家として習熟していった。高島秋帆が1839（天法10）年の蛮社の獄から11年の蟄居後に開放されて江川担庵の砲術役にされて戻った時、万次郎は同居してパン食しながら教授を受けて学んだ。それだけではなく、幕府通訳への英語教育、持ち帰りの諸資料の翻訳、通訳教育に勤め、さらにアメリカ在留著作が評判になり、多数の著作を刊行した。坂本龍馬は土佐出身だったから、土佐の画家が書いた万の著作をよく読んでいた。

1857（安政4）年に幕府が築地講武所内に軍艦操練所を設置して、その教育・実習のために勝海舟が砲術指南役を命じられると、万はその教授の一人に命じられ、そこで坂本龍馬にも会った。やがて万は北海道での捕鯨船、小笠原諸島周辺の捕鯨業、捕鯨船指導に乗り出していく。

第三節　江川担庵の悲劇死

万次郎は阿部正弘老中に江戸城でアメリカの話をして、その学の広さ深さに、万次郎は江川担庵の屋敷に泊まり、幕府は万次郎を土佐藩から移籍して幕府藩士とした。そこで担庵は万の姓を故郷の中浜とさせ、担庵が剣を学んだ神道無念流の道場主団野源の次女鉄16歳との結婚

をすすめた。鉄はおとなしい働き者で結婚して担庵の屋敷に住んだ。担庵は万次郎の職業、能力を信頼し、フェアヘブンのホイットフィールドと並ぶ日本の親ということになった。

ここまでは進んだが、決定的な障害が出て来た。万次郎は27歳、すなわちペリー艦隊との通商条約交渉開始の時であり、障害の理由は御三郷水戸斉昭にあった。斉昭は子の慶喜を一橋家（御三家の一つ〕にしているために御三郷になっていた。現在の十三代将軍家定は継承男子がないために家定死去後に将軍家になる可能性があるために幕閣候補の家臣たちには派閥の筆頭になっていた。それ故に阿部正弘は攘夷派筆頭として尊重しており、井伊直弼は溜筆頭として水戸斉昭と対抗する立場にあった。もちろん直弼は老中の役職にあるわけではないから今は対抗する理由はないけれども、城中の女性への振る舞いは目に余り、「外国の男は江戸で日本の女を見ると必ず辱める」と会議で放言した時には、「私は江戸、神奈川警備の時に外国兵の往来に立ち会うことしばしばだが、そんなばあいはない」と証拠を求めて斉昭と論争することがあり、斉昭には煙たがられていた。

ペルー艦隊来訪問題が起きて阿部正弘は斉昭を1853（嘉永6）年7月に海上評議に参加させることに決めたが、そこで通訳を担当するとしている万次郎はアメリカ帰国とペリー来訪の日が近接しており、これは万次郎のスパイ実行の疑いが濃いので、万次郎通訳を外せと斉昭は席上に文書で要求した。但しその疑いの証拠を示すことは出来ないのは当然だった。こういう場合には会議は老中の言葉でけりをつけるのが日本のやりかたになる。そこで日本側の幕臣の担当者は大部分が斉昭攘夷派なので阿部老中は万次郎通訳担当を取り下げた。

だが英国人通訳ではなく従来のオランダ語通訳では話が倍以上かかるので、せっかちな対応では間に合わないことと分かりきっていた。そこで艦を下りた日本側控室には江川担庵、万次郎が住み着いてアメリカの主張の翻訳、日本側の主張の文、そこでの応答の日文、英文、それから城での日本役人の主張、予定応答文の作成に当たることにした。それでなければ交渉が始まらなかった。一日のほとんどはそれで終わったが、阿部はそれ以外の仕事として持ちかえった万次郎の米文書の翻訳を求めたがそれは総て斉昭には極秘ということになっていた。この交渉は1858（安政5）年まで4年かかったことになる。

1854（安政7）年9月、ロシア艦隊が下田に長崎から来訪してアメリカとおこなった和親条約を締結し、その条約に基づいて通商条約締結交渉を開始した。これはオランダ語通訳だったから江川担庵も一息ついたが、この時安政大事変が始まり、ロシア旗艦デイアナ号が座礁沈没し、新建造が必要になった。この指揮者は島田貿易指揮官の江川担庵となる。江川、万は不眠不休で艦装備、機関整備、砲装備に取り組み、天候不良の中で担庵は工事場で寒気がつづき、11月には江戸から緊急帰郷の命令が相次ぎ、13日には籠で医師、万次郎がつききりで上京ということになった。15日には余震が響く本所屋敷に到着したが、ここで危篤になり、16日早暁に病没した。担庵の後は嫡男が継ぎ代官となり、万一家は広い浜御殿脇の浜の新屋敷に移り、江川の学業は高島秋帆以下に継承されていったが、万次郎にとっては担庵の息子は担庵の子であった。

第三章　幕閣の四国条約交渉の惨劇

第一節　幕閣の交渉準備

1853（嘉永6）年のペリー艦隊の来日、大統領通商交渉要求書の提出、明年再来日の通告があって、この大事件の到来に関して、幕閣は老中首座から全国藩主に対してその可否を二回にわたって設問を配送した。二回を濾過して態度のあいまいさが整理されていったが、二分された回答があらわれた。1つは拒絶して鎖国政策を堅持せよ、列島玉砕を覚悟せよ水戸学の藤田東湖が既に発表した文章の指示、もう1つは溜間城中の開港選択、貿易立国の主張であった。前者は徳川斉昭攘夷派、後者は彦根藩井伊直弼藩主の主張で、城中溜派の意見だった。これによって幕閣の立場は二分してしまった。島津斉彬は、将軍家定の男子生誕を狙って松平慶永を頼って島津一門から娘を妻の1人に送るのに成功しているので決められなかった。それは後に述べる事情が絡むので、簡単なことではなかった。

だが、幕閣は意思を決定しなければならなかった。そこで阿部老中首座は水戸斉昭を幕府参与に任命して幕府意思決定の閣議に参加させることにした。阿部の決定力の無力のよい証拠だった。万次郎、担庵が日米交渉会議に出席できなくなった理由はここにあったのである。

阿部老中首座は日米交渉が1月に開始された10月に老中首座を堀田正睦と両立させることとした。堀田正睦は溜間詰めで開国派でこれを両立させた理由は阿部は帝鑑間詰めで格が一段と低く、条約通過をしきる重役首座を守る必要が不可欠だったからだ。

水戸斉昭は幕府参与就任にあたって老中牧野忠雅、三河西尾藩主松平乗全、信州上田藩主松平忠固を溜づめ派として罷免を要求した。阿部伊勢家正弘は胃ガンで6月17日に死去した。日米交渉の日本側職員の川路聖藻、水野忠徳、岩瀬忠震などほとんが水戸派（一橋派）だったから、これらは交渉円滑を狙う狙いであった。

第二節　条約交渉の妥結とはなるが・・・・

ペリー艦長は1856（安政3）年7月に来日したタウンセンド・ハリスと交渉を交代した。ハリスは交渉妥結後、駐日アメリカ総領事として勤務する任務に任じられていた。先述のように1855年にはロシア軍艦が同じ目的で来日し、神奈川はこの外交関係で錯綜した。ハリスは1857（安政4）年2月に千代田城に登場し、将軍家定に全権委任状を提出、堀田備中守正睦の江戸藩邸を訪問したが、清国は阿片戦争で敗北し、イギリス、フランスの要求をきかねばことごとく所領を失う情勢になったと大演説をした。

そこで堀田老中首座は日本では精神的皇帝であるミカドの勅許をえなければならないので二ヶ月間の調印を待ってほしい。勅許は形式的で済むので勅許で3月5日と申し出た。堀田正睦は勘定奉行川路聖謨、目付岩瀬忠震など水戸派を連れて1858（安政5）年2月9日に朝廷に申請した。

条約朝廷不許可

ここから次の波乱が開始された。すなわちアヘン戦争が終結するからヨーロッパ大国艦船は日本に対して、大挙して神奈川湾に集結して交渉を迫る。その混乱を避けるためには現在交渉中の本通商条約の早期妥結終了が不可欠とするのがハリスの演説だった。

ところが、この妥結の相手は幕府（内政担当)、朝廷（外交責任）の二箇所に分散していたのが徳川時代であった。幕府武士は攘夷思想があり、体力は無いが気力思想は強い朝廷を宥める武士が分裂していた状態だった。そこで日米通商交渉の問題が国内で妥結が頓挫してしまったのである。

これには12代将軍家慶に継子がなく1853（嘉永7）年死去して、13代を誰が継ぐかということで水戸斉昭派と幕府派とが抗争してとめどがなくなっている状態であるのに米国が来日して、最初の国交交渉を求めたということであった。この日本の世界史学習の幼稚さには言葉もない。

第四章　日本の最初の外国正式訪問

第一節　井伊大老の最後の悲劇を見ずに

意思決定の主役となっている　溜まり詰めにいる彦根藩主としては京都朝廷と江戸幕府の均衡を常に考える役回りであることは地理としてやむをえないことだった。彦根藩は実際、家康以後大老を勤めたことが三人しかいない役回りもいた最重要な家格にいた。

阿片戦争で敗退していく中国に続いて日本列島が見舞われる非常な事態に対して、国内が武士の側で権力騒乱に悩み、老中首座のリーダーシップが失われ、ハリスに朝廷との交渉期限を1858（安政5）年3月5日としたのに、京都側が許可否認で老中首座出張申請なのに失敗が明らかになった以上、老中に最上位の大老を任命し、首をすげ替えなくては幕府は転落するという絶対絶命に追い込められた。締結期限は中国の阿片戦争終結期限で残る余裕はない。

そうなると大老候補は水戸斉昭の条約締結派しかいない。そこで堀田正睦は江戸城にいる松平慶永と京都帰国直後に相談した。ところが4月22日、お徒士頭薬師寺筑前守元真が、秘密の訪問として井伊直弼の邸に来た。この日は娘の婚儀が明日として直弼は在宅していた。将軍家定の依頼ということだった[4)]。

井伊直弼の将軍による大老任命は4月22日で通商条約調印期日は堀田正睦にハリスを招いて7月27日まで延期を承知させ、25日に諸大名を登場させ、「帝の意思は外国戦争したくないとのことで幕府の考えと同様である。そこでもう一度勅命に答えて意見書を提出せよと言明して最終交渉に入った。その上で大目付土岐丹波守、勘定奉行川路聖謨、目付鵜殿長鋭、京都町奉

4）次稿で本格的に扱うので吉田常吉『井伊直弼』吉川弘文館、昭和60年、徳永真一郎『影の大老』2巻昭和33年の優れた著作を予告し、またジャンセンの把握の見事さを指摘しておきたい。

行浅野長祚など水戸は左遷し将軍継承者を紀州慶福で一橋慶喜（水戸派）ではないことが家定の意思ではないことを公表したのだった。

アメリカとの交渉が再開されると評定事項は報告され、朝廷へ一旦おうかがいを出したのだから無断調印は出来ないと大老は述べたが、「大老一身に負い申す」と井伊直弼は断言して6月20日に調印は完了し、イギリスは18日、ロシア、オランダは10日、フランスは8月13日に調印は終了した。

アメリカとの調印では協約批准使節派遣が必要としてハリスはアメリカから日本使節を迎える軍艦が1860（万延元）年2月に来日する。条約批准は一人で可能だが、派遣人員を報告してくれと申し入れた。

日本から外国に開港を報告する最初の事件だから井伊直弼はこれを記念したかった。だが日本がわで検討に入ると巨大な人数になるので驚いた。最小でも人員100人以上で、アソリカ軍艦ボーハタン号以外に日本新購入船舶1隻が必要になった。

第二節　万次郎は晴れの遠洋大航海の技術立て役者

幕府は1855（安政2）年からオランダに依頼して海軍育成のための伝習制度を開始して勝海舟が最高指揮を長崎で行なっており、オランダ艦船を輸入開始していた。1859（安政6）年には勝海舟は軍艦操練所教師方頭取を命じられ、使用船は新規輸入の咸臨丸とし、その通訳に万次郎が主務に任じられ、新しくジョゼフ・ヒコと呼ぶ人が英語通訳可能ということで入った。だが、太平洋の嵐で運転・操縦できる熟練者が必要なので、日本人が乗船する咸臨丸には指揮官勝海舟艦長、通弁主務万次郎が乗ることになった。その日本人のために万次郎はニュー・イングランド語で「英米対話捷径」と呼ぶ80ページ程度の本を作成配付して好評をえた。

咸臨丸は随行船となってはいるが1860（万延元）年5月19日に浦賀を出帆した。天候著しく不良でまず10日間は難航状態で、勝海舟艦長がひどい船酔いで自室にとどまったきりで苦しみ、到着の際にも技能不備を主張して入港号砲をさせないひどさで苦評だったが、万は10年ぶりのアメリカ帰国の経験をしたし、久しぶりの評判を獲得した。だがその帰国は1860（万延元）年5月であり、井伊大老が桜田門外で水戸藩浪人に襲われて安政の大獄の終末を経験することになった。

第三節　勝鱗太郎（海舟）の思想確立

勝鱗太郎は号を「海舟」と称し、父が幕府の無役の微臣で、アヘン戦争の影響で海防、蘭学を方向と定めて1850（嘉永3）年に蘭学塾を開き、1853（嘉永6）年に幕府に海防意見書を提出し、これが大久保忠寛（一翁）に注目されて生涯の親友となった。大久保は海舟の思想を愛し、1855（安政2）年から小十人組に番入りを命じられて役人となり、蛮書翻訳勤務を命じられ、海軍伝習に進んだ。1859（安政6）年、軍艦操縦所方頭取として咸臨丸艦長となった。

主舟はアメリカ艦　ポーハタン号、護衛艦は咸臨丸で海洋渡航は難事だったが、1860（万

延元）年2月26日、船は2月26日（太陽暦）にサンフランシスコ湾に上陸し、ポーハタン号は航路不良で3月9日に入港した。両船は湾内の陸軍造船所で大修理に入った。老中大老井伊直弼の通商条約使節派遣の船なので乗船人員は厳重だったが、それでも軍艦奉行木村摂津守従者5人の中には福沢諭吉が忍び込んでおり、福沢は訪問先のニューヨークに急ぎ咸臨丸は随行艦として4月29日に出帆してハワイ・ホノルルに赴く予定で、艦長勝海舟は約2か月のカリフォルニア滞在となった。

この2か月のうち、勝の滞在記は『垣の茨の記』として克明な筆記で知ることができる。万次郎はすでにアメリカに住んでいたから、最新の天文学、物理学、米国史、代数学、新聞雑誌情報のほか、15貫もあるという箱型写真機（ダゲレオタイプ、現像・焼き付け処理揃い）を買い入れた。これは江戸では「写し絵」と珍重されるようになっていた。勝はカリフォルニアの工場、建築をひたすら歩いた。勝にとって最新外国の最初の旅であった。万次郎で言葉の不自由さは絶無であった。

この勝が残した記録を読んで、ジャンセン教授は「勝は井伊大老の時代で閉塞していた時に、日本は外部世界に対して全面的に開国し、日本の伝統を見下さず、この破滅的な戦争で国威を失う愚を避けながら、国力を強化するという建設的な成果を脳裏でえたのだ」と述べている。

結び

これで本論文の（1）は終わる。（1）は1827（文政10）年から1860（万延元）年2月の中浜万次郎の生活記録を基礎とした、幕末職業人の記録である。この時代についての日本史の著作者は、日本人が最高の文化保持者でありつづけ誇りを主張してやまないが、次の（2）では井伊大老の「安政の大獄」を出発として幕末を見直すことを試みてみよう。万次郎の生活史を忘れないこともちろんである。

（1999年6月16日受理）